

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 6 月 29 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	峠 明杜

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本モンキーセンター
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園・博物館実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 6 月 25 日 ~ 平成 26 年 6 月 28 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
公益財団法人日本モンキーセンター
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
本実習は、PWS のゴールの一つである「博物館・動物園・水族館で活躍するキュレーター(博士学芸員)」の育成のための実習であり、日本モンキーセンターの方々のご指導の下、動物園・博物館の役割を理解し、動物園の各部署でどのようなことがおこなわれているのかを把握したり、専門的な知識のない一般の人々に野生動物の魅力や研究の成果を伝える方法・工夫を習得したりすることを目的とした。
【日程】 6/25 レクチャー(伊谷園長)、園内見学(綿貫さん) 6/26 レクチャー(高野さん)、園内見学&来園者調査実習(赤見さん)、日曜サロン(岡本先生)、 科学コミュニケーション実習&レクチャー(大淵さん) 6/27 獣医見学(岡部さん)、展示学概論(綿貫さん)、標本実習(新宅さん) 6/28 飼育実習(アフリカ館)、JMC 霊長類基礎セミナー(早川さん)
初日(6/25)は伊谷原一教授(動物園長)より、霊長類学の歴史やモンキーセンターの歴史についてレクチャーしていただいた。フィールドでの野生個体の研究と実験室での飼育個体の研究を両輪として霊長類学が発展してきたこと、そしてこれからも動物園が研究の場としてあり続けるべきであること等のお話に共感した。その後、キュレーターの綿貫さんに案内していただき園内を見学した。まだ限定公開中の「ロリスコンザベーションセンター」も見学させていただき、スローロリスをじっくり観察できた。スローロリスは日本で的人气が高く、いまだに違法な取引がされている。ロリスコンザベーションセンターはそのような取引が摘発された際などにロリスを保護する場として機能していくそうだ。
2 日目(6/26)はまずキュレーターの高野さんから博物館としての動物園とはどういうことかについて講義していただいた。日本モンキーセンターは日本で唯一の博物館登録されている動物園であること、それは設立当初から霊長類研究所とタッグを組んで、他の動物園ではあまりされていない調査・研究にしっかり力を入れて取り組んでいることが評価されたからだそうだ。そうして研究成果を一般の人たちに発信して理解を深めることでコレクション(=展示動物や標本)の価値は上がる、というお話が自分にとっては新しくなった。
次にキュレーターの赤見さんに簡単に園内を案内してもらったあと、来園者調査実習を行った。社会教育施設でもある動物園でお客さんに正しくメッセージが伝わっているかを評価するため、展示の改善のため、来園者をより深く理解するために、来園者調査は行われている。自分はアビシニアコロボスの展示を対象に、その前を通るグループの属性(年齢層、性別など)、観覧時間、会話の概要を記録した。事前の予想として、平均滞在時間は1分、見学時のポイントは「しっぽ」「コドモ」だろうと考えた。結果は、10 グループをサンプリングして、平均滞在時間 68 秒、会話に頻出した単語には「赤ちゃん」「小さい」「かわいい」「しっぽ」「パンダ」などがあつた。概ね予想通りの結果であったが、「パンダ」という単語が出てきたのは予想外のことで、来園者調査の醍醐味を知れたと思う。
昼食後、毎週日曜日にモンキーセンターで開かれている一般向けの講演「日曜サロン」にて、一般のひとたちに専門的なことを話すときにどうすれば良いかに注目して岡本教授の寄生虫に関する講演を聴いた。寄生虫というマニアックなトピックで「進化」という難問を扱ったが、提出先専門的な用語を簡単な言

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

葉に置き換えたり分かりやすい例えを出したりしながら、結論である「ヒトとともに進化してきた寄生虫は(ヒトにとって)そんなに危険なものではない」ということを上手く伝えられていたと感じた。

最後に科学コミュニケーション実習として、キュレーターの大淵さんに科学コミュニケーションについてレクチャーしていただいた。科学コミュニケーションを行う上で相手との「コンテキストのズレ」をさぐるのが重要であること、「科学的知識」だけでなく「科学的思考(科学リテラシー)」も提供するのが重要であることなどを教えていただき、その実践として【科学コミュニケーション実習】を行った。展示動物の解説を通して、お客さんのコンテキストをさぐりながら対話するというもので、自分はバーバリーマカクの展示の前でお客さんに話しかけてみた。お客さんに話しかけること、お客さんがどんな解説を欲しているのかを察すること、お客さんに専門的な内容を話すことなど様々な難しさに直面したが、実習で上手くできていた点や同じような場面で次にどう対処すれば良かったのかなどを実習後にレクチャーしていただき、自分にとって非常に良い経験になった。

3 日目(6/27)はまず岡部獣医による手術を見学した。カニクイザルの抜糸、マンドリルの避妊薬&マイクロICチップ埋め込み、ワオキツネザルの抜糸といった3件の手術を見学した。手術の合間には、麻酔に関するレクチャーもしていただいた。手術を見学するのは初めてだったので、貴重な経験になった。

次に、「展示学概論」というタイトルでキュレーターの綿貫さんにレクチャーしていただいた。動物園の歴史、動物園における展示の特徴、展示の分類という3つのトピックについて話していただいた。動物展示の3要素「展示動物」「飼育・管理者」「来園者・観客」の三者それぞれの都合とそのバランスを考えるのが重要であるという内容が、自分にとって新しい視点だった。実例としてさまざまな動物園の写真を紹介してくださり、全体として非常にタメになる講義だった。

最後にキュレーターの新宅さんによる標本実習を行った。動物園での死亡個体を標本にする意義、また標本にまつわる情報をいかに活用するかなどについてレクチャーしていただいた後、実際に骨格標本をつくる過程を見学した。JMCでは死亡個体はすべて標本にしているようで、骨格標本にする際は水に1~2ヶ月漬けて骨以外の部分を腐らせるようだ。その後、実際に骨だけになったものを用いて、バラバラな骨を体の部位ごとに仕分ける作業を行った。自分は老齢で関節炎がひどくなり死亡したアヌビスヒヒの標本を担当した。老齢のため、骨どうしが癒合したり、骨が異常増殖していびつな形になっていたりした。逆に骨を見れば何歳ぐらいで死んでしまったかが分かるということに新鮮な驚きを覚えた。

最終日(6/28)は午前中に飼育実習をした。自分はアフリカ館の担当になった。まず各檻にいる種名とその頭数を確認する作業をした。アフリカ館にはパタスモンキー7頭、サバンナモンキー6頭、バットコファグエノン1頭、アビシニアコロブス6頭、アンゴラコロブス1頭、タラポアン4頭、サイクスモンキー1頭、ブラッザグエノン2頭、シュミットグエノン5頭、クチヒゲグエノン1頭、バーバリーマカク14頭、マルブラウクモンキー1頭、ゴールデンマンガベイ1頭、ギニアヒヒ1頭、マンドリル1頭、マントヒヒ7頭、以上16種がいた。面白かったのは、サバンナモンキーの1頭が同種にいじめられてしまうため、隣のバットコファグエノンの檻の中にケージで入れられていたことだ。今はお見合い期間中ということで、そのうちケージから出して2種を一つの檻で飼育する予定だそうだ。

次に、檻の掃除を手伝った。自分たちはパタスモンキー、サバンナモンキー、バットコファグエノンの3種の檻を担当した。その後、餌の準備として、園内にあるヤマモモの果実を採集したり、コロブスなど葉食者のために園内にあるサルたちが食べられる樹を探したりした。今の時期であればブラタナス、イロハカエデ、クワ、ヤマモモ、シラカシ、アカガシ、マサキ、キンモクセイ、シャシャンボ、シダレヤナギ、ヒサカキ、クロガネモチ、トウネズミモチなどの葉を園内で調達するようだ。今回はコロブスの大好物というクワの葉を採集した。最後に、動物たちのエンリッチメントのために30cmほどの長さに切られた消防ホースの中に餌をつめる作業を手伝った。

午後は、JMC 霊長類基礎セミナーという、モンキーセンターの飼育員向けにキュレーターの方々が開講している講義を受けさせていただいた。「野外調査・行動生態学」というタイトルで、キュレーターの早川さんにレクチャーしていただいた。モンキーセンターでは職員の大半が宮崎県の幸島へ生息地研修に行くようだ。動物園の飼育員の方がそんなに外に出かけているイメージがなかったので意外だった。講義では早川さんがいままで行ってきた場所とその地に生息する霊長類の写真、そしてちょっとしたエピソードを数々紹介してくださり、様々なフィールドを経験することの良さを感じた。

【総括】

今回の実習の目的である動物園・博物館の役割の理解、そして動物園の各部署で行われていることの把握は十分に達成できたと思う。自分はPWSのゴールとして第一に保全の専門家を考えているが、第二に動物園などのキュレーターも視野に入れている。どちらにしても、専門的な知識を持たない人たちに自分の研究成果を伝えなければならないときがあると思う。今回の実習を通して、そういった科学コミュニケーションの練習の場として今後もぜひともJMCを活用したいと感じた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



獣医見学



手術(抜糸)体験



標本実習

6. その他 (特記事項など)

今回の実習は PWS の助成を受けて遂行されました。関わってくださった皆様に厚く御礼申し上げます。